

第一章 田園に造られた都市

花の名所と呼ばれるところは、もともとは山野にあって人々を集め、魅了していた場所でした。それらの名所において人々を魅きつけたのは、梅や桜、松や紅葉といった、古くより愛されてきた花木でした。

第一節では、幕府の命により造りだされた、花の名所を取り上げました。上野寛永寺は、徳川家光の命で吉野より桜の移植が行われ、桜の名所として人々に愛されました。しかし將軍家の靈廟であるため、次第に鳴物などは禁じられ、黒門が閉まる暮六ツ時以降は山内への立入りは出来なくなりました。そのため、上野の花見は「風流」と評され、やがて発展する飛鳥山、日暮里、向島のような観光地の庶民的な賑やかさとは趣が異なりました。

徳川吉宗は、観光の目玉となる美しい植物を、飛鳥山・品川、隅田堤、小金井堤などに植え始めます。当時鄙びていた飛鳥山には積極的に桜・紅葉・松・野芝を植えました。この桜の植樹には染井の植木屋、伊藤伊兵衛の活躍がありました。享保十八年（一七三三）二月には多くの水茶屋が建ち並び、四季を通して市民の集う観光地が造り出されます。花を求めて集まる人の流れは経済にも刺激を与えました。

また、明暦の大火の後、大名・旗本屋敷の復興や寺社の郊外移転は植木の需要を高め、植木屋が活躍するようになります。大名家は、上屋敷・中屋敷・下屋敷をもつようになり、邸宅の林泉を整備しました。その一部は庶民にも公開され、それぞれの花の季節に人を集

めました。第二節では、武家の庭園とそれに集う人々の様子がうかがえる史料を採録しました。

第三節では、庶民の造り出した花名所について史料を集めました。龍の臥した形をした梅が人を集め、梅の実の名物となり、土産物として商品となりました。自然が生み出した、美しく稀少な植物に人が集まることかわかると、四季折々の草花を集め一年を通して楽しめる名所を造る人々があらわれ、商業的に成功していききました。時にそれは取締りの対象となりつつも、新たな観光地として発展していくこととなります。

第一節 造られる観光地

08 上野の桜

『東都歳事記』卷一下・二月記事
斎藤月岑他編著・長谷川雪旦・雪堤画
天保九年（一八三八）
関連図版01・14

彼岸桜 ○立春より五十四、
五日目頃より 東叡山 山王 車坂
寒松院の原 二ツ堂の前両側 四軒寺町入口
犬さくら 其外上野山中ハ彼岸
桜多

当山のさくらハその昔、^{（開字）}台命によりて吉野の苗を植させられし処と
そ、盛りのころハ貴賤雅俗こゝに群り、花下に遊宴して夕照の斜な
るを惜む、ことにこの地ハ都下を離るゝ事遠からず、春秋の詠めも

外ならぬ風情多し、鷲峰文集に桜か峯の辺^{山王}也の桜ハ羅山先生栽られし由記

09 飛鳥山の植樹政策

「十方庵遊歴雜記」初編之上

釈敬順 著

文化十一年（一八一四）

関連図版02・15

参拾八 飛鳥山の花見

（開字）

一、飛鳥山は王子の東三町にあり、此地は中古 有徳尊君、大岡越前守忠相に命じたまひ、当処の台を伐ひらかしめ、享保年間数株のさくら名花のみを植せしめたまひぬ、是全く公御一人遊覧したまはん為にはあらず、此地甚醜惡の片鄙にして、近郷に農家少なく、又は邂逅にありといへども貧村のみにしてかしたる土地なりしを、

当所に数株の花王を植さしめたまひてより、春秋の間遠近の瓢客、又はもろゝの雅人の遊山所となり、花咲そめるあしたよりもみちうつらふゆふまで、都鄙の男女爰に集ひ来り宴を催しあそぶによりて、自然と追々に家居建つらなり、茶店若干出来て、一村及び近郷の潤ひとはなれり、是文王の霊台、霊沼の慈愛に争が劣らん、近年別して料理をひさぐ酒楼は、互ひに庖丁と器物の好酬をあらそひ、中にもあふぎや、海老屋の二軒茶屋は、軒をならべて高宅を巧みに作り料理の美味に庖丁の手際なる器物には、善尽し美尽し客の需めに応ずるは辺鄙には賞すべきか、殊に辻竹輿は何挺となく、両

店の前に居流れて、草臥の人を扶けて歩行さらしむ、猶又四五年このかた虫聞とて夏の末黄昏より好事の雅客爰に来り両店の男女に虫籠もたせ、耕地の畝々を逍遊するあり、或は参会頼母子の類此亭に集会して弁用するもありけり、予が幼少の砌より江戸に名たゝる深川の式軒茶屋、又本所むかふ島といへども衰微^{スィビ}して、今只時めくはむさし屋のみなり、しかるに此地かじけたる片鄙ながら、王子稻荷の門前より、飛鳥山の麓までその間凡四町余、酒楼茶屋おのゝ軒を同ふし、繁華の土地にも劣らぬ様はひとへに 有徳廟の御仁恵といふべし。

一、此山の花王は、立春より七十四日目頃を最中とし、おのゝ古木にして王子よりは、少し早き方なり、又山上には成島大人のなせる碑あり、青石地上へ出る事高凡七尺幅凡壹丈厚さ八寸余、元文四年己未秋九月と刻せり、文は長きによつて略す、此辺おしなべて紙細工のからくりをひさぎて名産とす。

10 隅田川堤の植樹政策

「十方庵遊歴雜記」初編之下

釈敬順 著

文化十一年（一八一四）

関連図版03・16

一、隅川堤の花王^{サクラ}は、享保年間に植させ賜ひ、その後延享、明和、寛政年間と度々に植添ひ賜ひ、冬は花王^{サクラ}の根毎^{カンゴエ}ゝに寒糞^{カンゴエ}の御手入等ありて、堤の左右は一面に木母寺の門前より南の方凡七八町が間

更に余木をまじえず、往来の両側に挟んで、花王の古樹幾千株花形又あざやかに、その香芬くとして眺望いはん方なく、世上の春を爰にあつめたるが如し、彼武州多摩郡小金井の花王は、玉川の分流を挟んで川丈三里の間桜のみにして絶品なりといへども、中に川ありて左右の往来を逍遊し眺望す、殊に左右の往還路幅広からず、土地打開かざれば桜花のみ多しといへど、景望になぐさむべからず、今此隅田堤の桜は、小金井に比すれば百分一といひながら、川に添ひ耕地に随ひ近く見遠く眺望す、風色実にはん方なし、花は立春六十三四日目ごろよりを最中とす、但し年の寒暖にもよるべし、飛鳥山王子辺にくらべては、水辺といひ、日あたりよければ、花の盛十四五日も早し、又爰に木母寺より南の方、隅田堤通り凡耆町ばかり西側なる土手下の桜は、根の少し上より枝五本にわかれ、四方へ繁茂する事凡五六間、此五本の枝の内に耆本は式間余あがりて又枝を生じ、太さ凡耆尺四五寸廻りもあらんか、此枝のみ八重ざくらにして、花又普賢像とやらんにて、諸木に抜群して艶はしく、此面又四方へ蔓る事三四間、此花下に出茶屋あり、即ち隅田村の百姓甚助といへるもの、爰に茶店を構えて茶をひさぐ、甚助が曰、此はな是迄土地の我輩もころろ付さりしに、過し頃公御成の節不図御目にとまりしより以来、わが輩も知、又世上にも聞伝へ賜ひしにやと物がたりき、予彼樹下に憩ひて、能く見しかども中く接たるものにもあらず、又寄木などいふ類にも非ず、天造の所為として、自然と一重の桜の枝に八重の小枝を打しと見えたり、誠に奇品のさくらと賞すべし。

11 品川御殿山の植樹政策

『江戸名所花暦』巻一
岡山鳥編・長谷川雪旦画
天保十年（一八三九）
関連図版04

御殿山 同 西品川、寛文の頃、吉野のさくらの苗を植させ給ふ、今古木となりて花ことにうるハシ、朽たる木の傍にハ若木を植添て、盛の頃は雲か雪かとうたかふ、向ふを望めハ安房上総の山々霞のうちにほのミえ、諸国の船は真帆あけて入津する光景いはんかたなし

12 小金井堤上水を守る桜

「十方庵遊歴雜記」初編之上
釈敬順 著
文化十年（一八一三）
関連図版05・06

五拾五 小金井村の花王

一、武州多摩郡小金井のさくらは、府中の駅の北耆里半、猪のかしら弁天うら通東北の方二拾余町にあり、立春凡七十日頃を最中とす、但し年の寒暖にもよるべし、是小金井村取分桜樹多き故、こかね井の花王と称す、曾て小金井橋は玉川上水へ懸わたせる板橋にして長さ五間、此水西は羽村といふより北にわかれて、東武にいたる迄直流十里余、大小の橋元より多し、みな地名を以て橋の名とせり、則ち南は野中、鈴木、貫井、小金井、梶野、北は廻田、野中、鈴木、

是政、関野、境新田と兩岸拾ヶ村にかゝりて、東西一里の間桜木多し、左右は往来にして中に玉川の長流をさしはさみ、兩岸石垣なく川幅僅に三間余、逆流の清潔たるは目覚る心地ぞせらる、此長流の兩岸に桜樹数千株を植て、川筋を見わだすに、更に目のおよぶ事にあらず、凡桜のみ長流にそひて兩岸、数千万株の花を見る事爰に尽ぬべし、此桜樹は中古元文中御代官川崎何某台命によりて植しが、今みな大木になりて、開花の時節は実に芬芳鮮美又あるべしと思はれざりき、依て（開字）有徳君はよし野のながめにもまさりぬらんとて、勝野カチノとも地名を付させたまふとかや、此長流にわたせる橋すべて七ツある中に、小金井と貫井のふたつのみ公より掛さしめたまひ、猶その風景にいたりては、小金井尤すぐれたり、此橋上より西の方は英岳函山を望み、又西岸をさしはさむ桜花は、落英繽紛として前後尽る所を見ず、武州一国の壯観、春色爰にあつまるものか、此小金井橋の左右に、両三軒の酒樓食店ありて、聊飢をしのぎ旅情をなぐさむ、此地遊覧の雅客は大旨この酒樓に止宿すとなん、されば此川筋の兩岸に花王を植しは、春をたのしむのみにあらず、花散つて桜の実逆流に沈む時は、水毒自然に消除して無病ならしめんが為なり、実に此地の風景は愛すべきものおや、左はいへど心よく憩ふ処は、唯此小金井橋のみにして、川筋往来の間更に茶店なく、邂逅サカヅキに店といふものあれど、馬奴マヌの徒集ひ居て憩ひがたく、茶に乏しく酒に渴食カクシに飢るの土地たり、隅田村の花見に比すれば、桜に於てはよしと雖、古今の僻地、後人逍遙してしるべし。

13 小金井桜の観光案内

「調布日記」
大田南畝著
文化六年（一八〇九）
関連図版05・06・65

卅日。空くもりて、小雨ふらんとせしが、をやみぬ。今日はもろ人とゝもに小金井の花みんとて、宿のあるじ忠兵衛が案内にて立出づ。下つかさのもの日野宿のあるじなど伴ひゆく。府中六社の馬場を出て田畑をゆく。松の木たてる山のもとり右に折れゆく事長し。これまでは国分寺村也。本田新田といふ所より、左に曲り、右に折れて、農家にいこふ。小流をわたりて、むかひにセウヲウ寺といふ浄土真宗の寺あり。此寺のわき道より左の方にゆく。こゝに馬捨場あり。小流をわたりて野中新田をすぎ、めぐり田新田にいたりて、上水のほとりに出ぬ。橋あり。留橋といふ。これより西の方をみれば、二三町ほど桜の木まばらにならびたり。上水のむかふは車田新田なり。それより兩岸に桜ある所を過て又橋あり。貫井橋スグイといふ。左の方の村を鈴木新田といふ。上水の水をわかちひく所、二所あり。右の方にも貫井新田小金井村外壺ヶ村組合といへる用水の道あり。ゆき／＼てやうやく左の方に水めぐりゆきて、あとにみし桜みえず。ゆくさきの方は桜の花とをく見たさる。右の方の村を下小金井村といふ。橋あり。小金井橋といふ。こゝに海岸寺といふ黄蘗宗の寺あり。一の酒屋ありて、酒肴をひさぐ。これを柏屋勘兵衛といふ。此高どのに上りて昼の餉をくひ、携へ来れる酒くむ。置

春洞のあるじも花みに来れりとて、酒を贈れり。酔心地にたち出て、猶関前新田のかたにあゆみゆけば、関野橋といふ橋あり。此所より左右をみるに花はさかりにして、雲のごとく霞のごとく、上水の流はねりぎぬを引たらんがごとし。これより末にも梶野橋、新橋、保谷ばし、連雀橋のあたりまで桜ありといへども、まばらにしてとだえたる所々多しときけば、こゝに足をとめて小金井の橋をわたり、府中の駅にかへらんとす。そもこゝ此さくらは、元文のとし、和州吉野、常州桜川の桜のたねを蒔植よとの鈞命ありて、新田掛大岡越前守、新田方川崎平右衛門、木数一万株千株トモ云小川村の地内より千川上水の口まで六十町の間、兩岸に植そめて、延享の頃までは年々に御植つぎありしが、其後はその事なきゆへ、年をおひて木数すくなくなれりと云。いづれも古木にして、其花も酔色ありて、葉の色うるはしき山桜多し。これ吉野の種なるべし。又色白くして葉は色青きも、所々にまじれり。是常州桜川の種なるべし。堤のはゞは三間づゝにして草生ひしげれり。蕨などあり。又外にひろき道あり。空晴れば花の間に富士のねそびへ、連山下につゞきて風景よしときゝしが、けふは空くもりたればみえず。されど花は軽陰によろしときけば、日影のさせるにもまさりなん。年頃此花をめゞ、大江戸のうちいたらぬくまなく見ありきしが、かくはてしなき桜をみし事なし。年六十あまり一ツになりて、はじめてかゝる花をみき。近ごろ清朝の石鈞といへるもの、嘉慶八年癸亥の夏享和三年にあたる梓にちりばめし清素堂文集に遠梅居士の伝あり。愛梅遠望尤多致、与性合故以為号とあり。わが性、桜を愛する事、遠梅の梅にゆづらず。今日よりして遠桜と号して、此日此花のながめをわするまじく思へり。帰路は小金井橋より下小

金井村、上小金井村をすぎて岐路あり。西国分寺村右府中大山道左是政道といふ石表をみて、府中道をゆく。左の方に高くみゆる山は人見塚なりと云。新宿のなかばに出、番場宿鍵屋忠兵衛がもとにかへれり。申の時ばかりなるべし。小金井橋より此所まで一里十二町といふ。

14 桜・櫨・海棠の景を作る

『甲子夜話』第三冊

松浦静山 著

文政四〜天保十二年（一八二二〜四二）

林子曰。徳廟御実政の、世を利し民に沢あるは、皆人の能知る所なり。その佗好古御風流の事は知もの稀なり。吹上の御庭にて、三月きくすいのえん曲水宴みづかを設られ、中秋月宴には諸臣に詩歌を命ぜらる。延喜式の染方を親に御試ありて、凡三十余種は呉服商の後藤に伝へ給ひ、その家にて今も御秘事の染方と称す。御賄所に命ぜられ、式の法に倣ひ、大根を漬させられ、御上りとなりけるが、今其遺法を以て年々製造し、延喜式漬と称す。明日香山、住太川に桜を栽させられ、芝新渠の岸に櫨を栽へ、霜紅の美観とし給ひ、本所羅漢寺は海棠を多く植させられしと。これは卑湿の地ゆへ、その性に叶ふへしとの思召となり。西土にては海棠を賞すること多けれども、本邦にて海棠一色の景を思し寄せられしは権輿とも云べし。今はいつ枯果しや跡方もなく、其事知るものさへなし。

第二節 武家の庭園

15 大名の造った庭園

「十方庵遊歴雜記」初編之中

釈敬順著

文化十一年（一八一四）

関連図版 07

六拾九 松平甲斐守林泉の逍遙

一、松平甲斐守下やしきは、染井伝中とかやいへる西側に有、頃は長月二十五日染井の里の菊花みん物ともし隠者の茶友三四人誘引つゝ、彼藩中にすめる植林長純とかやいへる茶道の宅へまかり、庭掛りの者案内して当主の隠宅と覺敷住居に添て、北へ行事凡壺町計りにして六義園と認めたる額懸りし萱門に至る是庭の入口となん、此萱門を右に見つゝ、又西へゆく行数十歩にして小門を過、玄関と覺しき広敷を過て庭口に至る、是広庭の書院先と覺ゆ、亭宅は残らず鎖して見ざれば論じ難し、此住居西北に雨戸引立て面白き石の手水鉢二ヶ所にすへたれば、北に座しては北山の風景に慰み、又西に座しては西の方の滝口より、泉水の清流を眺望する様に、家作せしものとみゆ、此住居空房といへ共、大サ千石以上の居宅の如し、先此処に暫しゐて庭中を眺望するに、広き事二三町四方も有ん山有、清滝有橋有り野有茶亭有宮有りて、よろづ木立の物古りて屈伸の天然成ん、風色奇く妙く、更に設けし庭中とは思はれざりし、斯くて亭宅の右小高き岡の上に碑を立て、庭中に八景有事を刻し、石

の裏に林泉の文長くと瑕付、大多和克孝山寺忠順識之、関克明投筆して、過し文化七庚午年九月此碑成よし見えたり、根府川石の高サ四尺計成もの也、文はくだくしく案内の者早く見終れかしと、つぶやくまゝに写さず、八景の次第左の如し、

若浦春曙 軒端山月

六義園八景 筑波陰霧 蘆辺水禽

吟花夕照 紀川涼風

東叡幽鐘 士峯晴雲

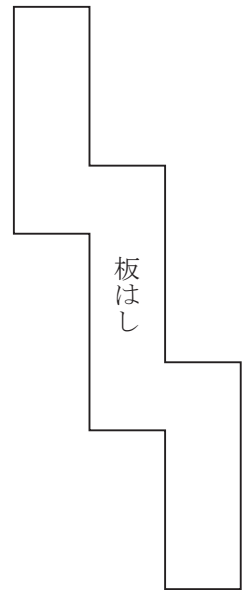
と瑕付たり、林泉間東西三町計り、南北又三町余も有べし、山に岡に橋に木石に、皆夫々の名有て、各其側に四角の石碑を立てて、一々に名をしらしめたり、是によりて見洩さじと段々に分入、限く逍遙するに、先多川の橋と云を渡りて、中央の島山に至る、種々の奇石怪岩は、山の裾より半腹迄湧出するが如く、繞凡二町余も有らん、是より山の北後を下り、又川にそひ峽路を過土橋幾つとなく越て、北後に高嶽あり、富士見山と名づく、頂上平坦成る事凡五六間、爰に憩ひて前後を眺望するに、庭中の思ひにはあらで、寂寞たる深山に遊ぶが如し、此嶽より西南に芙蓉峯を正面に見る、則此庭中の茂林より直き芙蓉嶺の裾迄つゞくが如し、絶景いふべき様なし、依て富士見山と号す、又後に山二ツ重れり、其峽路の間屈曲の模形自然にして、橋を趣て藤の里の葦屋に至る、此家更に農民の舎の如し、是より東に萩の原川添に山吹の汀を過て久護の社に至る、総て林泉の風景四季共に足ぬべく、広き事迷ふに似たり、能その所々の景地に憩ひて、寛然として風景になぐさまば、春の永き日と云共飽ずして、一日には見尽し難からん、取分奇石怪岩の多き、

又良木灯籠の若干成に、昔甲府の少将といえりし威勢は、今此林泉にて思ひやらる、常憲尊君両度まで成らせ賜ひ、此庭中に終日遊覽し賜ふといひ伝ふるも理りと思ひあたりぬ、予が遊行せし頃は、九月下旬なれば、萩も立枯となり、広野の草の花ちりて、只穂薄の尾花のみ野に山に良、枯野の気色と成りて、只楓の漸くうすもみぢせし風情も、優に面白く恰も野外の山林に遊ぶの心地ぞせらる、されど手入も行届き兼るにや、山間は木の葉徑を埋み、立枯の草木又甚多し、若是を約かに掃除せんとせば、仮令二百三百の工夫に命ずるといふ共、半だに掃清め難からん、庭中の広さを推察すべし、予九月廿五日午の刻より申の上刻迄、見洩すまじと駈廻りて、彼名をしらしめたる碑を書留しかど、猶未尽さず、必花の咲頃は、ふたゝび追遊して、明細に書写し遊ばん事を思ふのみ、依て荒増を誌す左の如し、

- 一新玉の松 高サ五六丈朱の玉垣の内にあり
- 一古風松 高サ式丈四五尺
- 一風雅の松 高サ凡三丈余
- 一多川の橋 三ツ股の川にかゝる、幅二間長サ七間計板橋
- 一出汐の湊 泉水の正面の汀をいへり
- 一かね言の路 島山のうしろをいへり
- 一妹背山 島山の頂上左右の高嶽をいへり
- 一ことゝふ松 三ツ股の汀に有り
- 一鶴鶴石 多川の橋際松の下に有り
- 一詞花石 島山の北側池の汀にあり
- 一ときは石 妹背山の下南側にあり

- 一かきは石 ときは石の下なる大成怪石をいへり
- 一浮囊石 同所汀にあり
- 一玉笹石 妹背山の裾に有り高サ式丈余幅凡四尺四五寸
- 一背山 島山の頂上東の方の高嶽をいへり
- 一妹山 同じく西の方の高嶽をいへり
- 一紀の川 北側の山の裾通りの川をいへり
- 一裾のゝ梅 北側の山の裾通りの原に有り、名花の由巷談す
- 一紀川の涼風 いもせ山の裾野の芝原をいへり
- 一臥龍石 同所の西の汀に有り、長サ二間半計其形鯢といへる魚の如し、鯨石と名づけたらば可ならんかし
- 一背の松 山下の渚にあり
- 一積和歌石 同所汀の芝原に有、大石にして形は面白し
- 一かたほ波 同所の渚通りをいへり
- 一渡月橋 いもせ山の北の清流にかゝれり、長サ五間土橋
- 一ちとせの松 山の裾野の広野に有、真直に成木し、高さ凡四丈枝の屈伸天然たり雌松
- 一藤波橋 東北の方に有り、長サ五間計土橋此川向ふに幅九尺長サ拾三間に藤棚あれば也、花の頃は見度ものをや
- 一さゝかにの道 ぶぢなみ橋の際より西の山路へ通ふ曲れる徑をいふ
- 一高峰 藤波橋の西の山をいへり、なだらかに高く種々の古松繁垂し、別世界の如く只野猿の声のみ聞ゆ
- 一筆すて松 高峰の東の半腹に有り、枝の屈伸凡左右へ十余間取分西の方へうねりし様景樹といふべし

- 一ふじ見山 藤代峠の頂上をいえり、前にいふが如し
- 一山陰の橋 長サ五間計土橋此辺深山幽谷の思ひ有り、
- 一藤里 田舎の如き生垣の構へわびしき突上の枝折戸有りて、藁葺の大サ六間半に二間半、長囲炉裏繩簾筵屏風の様更に農人の住居の如し、されど勝手の棚板等皆秋田杉くろべ杉或はよせ木等にて作れり、造作の木口外又察すべし
- 一荊溪の流 山陰橋の流をいへり此川東西長サ三町計葭の間／＼に杜若沢潟河骨太藺の類のみ生じて又一品たり
- 一晒錦野 藤里の東にして萩のみ植し広野也
- 一駒留岸 山陰橋の下流汀通りは悉く山吹のみ也
- 一下てるもみち 駒留の岸より左に入山路の双方の岡は楓の木のみなれば、予が逍遙せし頃も薄もみぢして秋色の風景を添たれば、猶一面に染なしたらばさぞやと思はる
- 一久護の社 下てる紅葉の山奥東北の方に有、堂一円四面と雖壯麗にして本尊は毘沙門天也、則久護山といへる豎額をかけて後山に見上て、高きをくぼ山といえり、堂前大木の椎有り廻り三抱あまり高サ三丈余、枝四方へ垂茂して闇きが如し、又手水鉢敷石等悉く肌目細に作事せり
- 一芙蓉橋 長サ三間余板橋板橋藤里の西の清流に渡せり
- 一水音の丘 芙蓉橋の西汀通りをいへり
- 一花まき山 水音の岡の北の山をいへり、一面映日紅なれば也
- 一すゝの下道 花まき山にそひて西北の山道をいへり
- 一椎が山 西の方の高山をいへり
- 一むての岡 椎が山の南の裾通り也
- 一尋芳径 熊笹山の左の別れ路をいへり
- 一覽古石 形チ大葛籠に似て石上平かに景石と云べし
- 一紀川の水上 西の方滝口の下をいへり
- 一旭のいはほ 滝の落口に有る大石也青くして両面鏡の如し
- 一枕流石 滝の下に横たはる大石也、形ちくゝり枕の如し
- 一水分石 落下る飛泉此大石にあたりて左右へわかるゝ処也
- 一鈴玉の渚 滝の下五六間はなれて、河中に飛石の如き丸石平石等いくつとなくありて、此石をつたはりて河中を行通ふ也
- 一達磨堂 滝口の上右の方覗の石上にあり、大サ九尺四方西には壁なく三方は腰通り小壁有りて、此所より右に飛泉を見、東に紀州の浅流を詠め北には波濤の如く溶りつらなる山々を眺望して、風景飽ざるの勝地たり、此処の滝口高サ九尺計り昔板橋の駅の彼方より千川上水を爰に引て十分に飛泉に仕懸たりとなん、甲府少将と辻昇進せし昔の勢左も有つらん、今は滝更にかれて水一滴もなし、嗚呼おしいかな
- 一山茶花 滝の上茂林の中に有り、樹の太サ二抱余高サ凡三四丈枝四方へ繁茂し、折しも花最中にして匂ひ梅花に似て鼻をつらぬき、花色薄紅にて大きく、かゝる大樹是迄見たる事なし
- 一亀浮橋 長サ三間幅一間余、一枚の天然の青石にて懸渡せり、是迄にいふ鈴玉の渚の下流也
- 一仙人岩 滝口の左に独立する景石也
- 一千鳥の橋 長サ五間余幅九尺計り板にて作る、是亀浮橋の下流紀川の水上たり、橋の摸形異風に作り欄干なく格好左のごとし



- 一しら鳥の関 千鳥の橋の西南の山路をいえり、是より門構あり
- て南の方茶亭に至る、此所更に深山幽谷の如し
- 一おぼろの岡 しら鳥の関の山の裾をいへり
- 一わくの松原 南の方小松原をいへり
- 一名かくる松 わくの松原の中の雌松高さ三丈計
- 一詞源石 同所
- 一詞林松 同所の南にあり
- 一玉もの桂 同所
- 一見山石 同所小山の形に似たり
- 一妹の松 同所横庭の中央にあり
- 一にほの松 紀川の南渚にあり
- 一ならの林 同所の坂路をいへり
- 一もしほ木の道 同所の坂路をいへり
- 一かすみの入江 同所北の汀をいへり
- 一吹上の小野 同所の北の広野をいへり
- 一雲香梅 同所の広野に有り、囲をして名花のよしなり
- 一霞の松 同所にあり、高さ数十丈半より枝三本にわかれ、屈曲の景樹造たるが如し

一かもめの橋板橋長さ五間計かすみの入江に渡せり

一浪花石

一座禅石

一かすまぬ坂

右の外、碑を立て名をしらしめし樹石景地若干有れど、此日ふりみ
ふらずみ空定めなし、雨具乏しければ見残して、又来る春を兼約し
て立出ぬ、総て庭中造れる樹木多きものなるに、甲州の林泉に限り
ては、天然にして更に山中野外に遊ぶが如く、絶景に又広き事目を
驚せり、昔世に時めきし勢なくんは、中々此庭成就成難かるべし、
常憲尊君の両度まで、御遊覧有らせ賜ひしも、理りになん。

16 朝顔、藤、菊花絶品の松平播磨守上屋敷の林泉

「十方庵遊歴雜記」四編之上

釈敬順 著

文化十一年（一八一四）

第拾壹 松平播磨守の林泉逍遙

一、松平播磨守上屋敷は、小石川阿波殿町と橋戸町の間に挟りて南
北凡三町半東四町余あり、西の方は簞笥町に隣りて高く、東は橋
戸町を境ひて甚低し、されば当屋敷の薺は花種類多く、菊花又数品
ありて、手入も格別の由巷談す、猶又林泉の巧に風景の能、藤花盛
は一入絶品のよし、世上とり／＼の評判なれば、文政二巳の卯年七
月上旬薺見物せんと、未明より館万里、加村弁輔、鈴木忠次の三人
を同道して彼所にいたる、折節小原通斎は明番にて居合せ、我輩を

案内して隈々迄を見せたりき、則も館をくると北東へまわり崇敬寺に隣る、東の方の塀重門を入て林泉にいたる、爰に右側に稲荷の小社あり又一ツの塀重門を入左の馬場の半より小坂を登りて高きにいたる、爰に式本の柱と垂木のみ竹を用ひ其外みな葬にて作れる枝折戸ありて、是より内両側みな葬なり、一種の根もおのゝ三尺づゝ即ち北へ行事凡十五間道幅五尺計、その数六十種源氏の巻を名にせり、花に葉に一種として似寄たるなし、又北の行とまりより西へ曲れる路、是又両側に数百品の葬類ありて花葉みな異なり、此路長さ式拾四間西の突あたりに葬にて作れる榜示杭式本あり、長さ七八寸高四尺計葬にて作れり、又南へ曲る処拾五六間両側みな葬のいろゝの種類ありて、それゝの名あれど一々記するにいとまあらず、中程に左へ入て茶亭あり大さ二間四方計、家根のみ萱にて葺三方の壁悉く葬を以てし、殊に瑠璃の白にあさぎに絞などの真盛に、壁に咲みたれし様中々筆端には述べがたし、爰にたば粉盆及びもろゝの茶具を取そろへたれば、おのゝ、茶店に憩ひて茶を啜し眺望するに、界限みな葬ならずといふ事なし、その数二百余种となん、実も、葬はあさなゝに咲かへて盛久しき、と歌によめりしも今此時にして、右に左に更に更に目の隙なきは絶品といふべし、又南の方館のめぐりは綿圃茄子の花など今を真盛なるも、田舎にあそぶ心地せられて又面白し、斯て弓手の小坂を下り右に添て、馬場を過数十歩にして林泉の口にいたり、是より爪先さかりに低く泉水あり、長さ東西一町計南北も又是に准ず、此泉水の北東を折廻して二重に作りし藤棚あり、泉水の縁通にて池水へ望めり高さ八九尺長さ六十余間、又右の高みに茶亭あり、家作三角に作りて東南西の三方

に柱なく異風といふべし、是より池水を見下す風景又只ならず、是より坂を下り左へそひて池辺を逍遙すれば、小舟二艘つなぎ置たり、折々は此池水に棹さし宴遊する事になん、斯て池辺をめくりて西の方山に登れば、頂上に四阿屋を作る、腰掛あり大さ式間四方、下をば油石灰^{シツクイ}にてたゝき石ところゝ据たるは待合にやあらん、是より又東北の方の坂を下り巧みなる踏越などありて、水湧出せる溪澗あり、これ世にいふ極楽水の本源とかや、昔三ヶ月上人了誉が祈念によつて逆流せし名水ぞと言伝ふ、極めて湧やうに見へねど、水湛へて池辺へ流る水を掬し嗽し見るに、冷かなる事氷の如し、此面影を崇敬寺の境内に、井戸屋形に作り移せる極楽水これなり、されは巧なる踏越などを過て、池中の一亭にいたる、此亭東南に向て建たり大さ式間半、うしろに台処と覺しき勝手調度等あり、是折々此亭にして茶事および酒宴の興もある事と見ゆ、されば此茶亭に坐して花に月に雪の景色は嘸かし能からん、取分真正面に池汀を二重棚にめくれる藤花の盛の頃はいかゞあるへき、藤花の頃に逍遙せされは評しがたし、是より平石二枚掛わたせる橋を越へて中島にいたり、東の池辺を逍遙して元来し路へ出けり、菊花はいまだ荅のみにて、節大きに早ければ見ずして立出ぬ、林泉といひ、葬といひ、通伝を需て見ずんあるべからず、

17 松平定信の汐入庭園

「浴恩園仮名の記」

松平定信 著

明治二十六年 (一八九三)

関連図版 08

浴恩園仮名の記

浦わの翁のすめる里はつき地といふ、西のかたに柴門あり、いさゝかの廊あり、廊のすのこにつまどあり、こゝより入ぬればまどかなる額に楽の一字をつけたり、そのうちは翁のはや起臥する所なりとぞ、それを千秋館といひて、輪王寺親王額かい給ふとかいふ、西のかたにいとさゝやかなる間あり、これを日新簾といふ、千秋館は南おもて、しとみ一つ設けぬ、東のかたは養気室となづく、そのひさしよりつゞきたる小室のおもてに清風明月の額かけ、内には風月の二字水月君のかい給ふを、もみ川の埋木につけたり、うへには翁がむかしよりみし山河のけしきをかゝせて張り、其額に処々青山是故人とかいふ句を阿波の拾遺かい給ふ、又そのつゞきに一楽の文字かいたるあり、千秋の庭は南に池あり、西は盆松などを初めとしてさまゝならべ置て、翁日ごとにみづから水などそゝぐとぞ、軒ばにいと年老たる松ありて、苔など生ひぬ、其かたはらの梅は名もなき物から清香ことなりといふ、そのかたに桜あり、これを常盤さくらといふ、これも菟裘うつしゝ頃うゑたり、軒にならぶばかりなりしが、年々にいとたちのびてけり、この花、園の花ちりぬる後も盛りをのこせば名づけしとかや、軒の下には流れのかたちありて、白き

さゞれをしきたり、玉水のおちてなぐるゝも盤石の水をもこゝにおとさん料とぞ、其流れにひろき六尺長さ一丈三尺余といふ石の大きな橋あり、千代の岩ばしとかいふ、そのちに紫の石あり、こは東邸よりうつしゝなりとぞ、南のすのこより七八間にして芝うゑたる所はまひまふ台なり其むかひは池なり、池のきしは千とせの浜といふ、池は春風を名とす、其池の中から松のをかしく生ひたる嶋ふたつありて、名残の島といふ、一つはなごりの小島といふ、こは昔し塩がまの浦みにゆきたる折、あけぼのに松島のほのゝと間近きが二つばかりみえしを、身にしみておぼえしが、このふたつの嶋みれば、かならずその曙のこと思ひ出すとて名づけしとかきゝぬ、またかの岩橋のかたはらに柳あり、きぬがさと名づく、こは六角堂の柳の枝さしたるなり、いまはその六角堂の柳はかれうせて、こゝにのこれるもをかしきと、都人はいふとやらんきゝぬ、こゝに門あり橋あり、松の大なるが橋をおほへばにや、松濤深処の文字を門にかけぬ、はしを出れば色香のそのにて、梅多くうゑたり、門と橋の間には大庚嶺の梅と、小倉のもみぢ、まがきの竹とをうゑぬ、まがきの竹とは、柵やうのかたはらに竹をきりて多くたておきたるが、いつか根つきて枝生じけるなり、めづらしとて、こゝにうつしたりときゝぬ、かの館の西のかた盆玩などならべしあたりには、様々の蓮をかめなどにうゑおきてけり、こゝに露台あり、望嶽といふ、不二はさらなり、箱ねの山ゝものこりなうみゆ、もとこの地は高からねども、みわたすあたりに山も森はやしもなきにや、千秋館の窓よりも坐してふじをみる、江戸のうち高きところはあれども、楼台ならで不二みる事はいとまれらんかし、台の下は、むろといひて冬

にたへざる盆玩のものいるゝ設けなり、台のかたはらに小柴かき引まはしたる一つの園あり、石いと多ければ石園といふ、さま／＼石もてたゝみて山とし池としてつくれり、多くのいし色も姿もさまざまなるを、たくみにつくりあげたるは、この翁のしたることにて、石はみなこの園中の池のきし水のなかなどにうもれぬしなど引あげたるなり、もと此園は猷廟のころ、いなば濃州の別荘にして、知る所も小田原なりければ、それよりもうつし人よりもきそひても贈りけるが、石ことに多し、橋邸このやしきかへ給ふ折も、木石御心のまゝにうつし給へかしとねぎたれば、多くうつし給ひしのこりなれば、むかしこちたきまで石ありしをも知るべし、翁こゝを我物にしても、かゝる名園古跡の木石みづからのものとせず、聊もこの園中の外に出さずなん思ふ、この園のうちに石五つは翁のものなりと人にもいへば怪みわらふ、そはこの石園に二つは大洲の君の船底にいれし石の不用なるをいれしに、日新移の軒の下に白き糸の平らかなる二つは本邸よりうつしゝなり、石園の中央にかはらをふちにし土もありあげて牡丹を植う、石山の下、池をへだてゝ疊二つ余りしくべき石のうへに亭を設けて、露盤に涼風の字あり、げに木だちしげりて、夏もこゝに來りぬれば、ひやゝかにぞおぼゆる、その山の上に堂あり、もと田安の姫君こゝにうつり給ひたるが、とみのやまひにて身まかり給しを、あかず名残思ひて、地藏尊一軀をつくり安置して、三とせがうち日毎にまうでけり、みとせ過てその像をバ深川の寺に納めぬ、その堂も用なかりしを、北の方ひたすらにこひ給ひて日蓮の像を置給ひて、今は妙華堂とかいふ、山の下門あり、うつきの二つ三つあればにや、うつきの関となんいふ、此関をこゆれば、

右は池左は桜のなみ木にて、きぬ桜といふもこゝにあり、遅桜にて色香ことなれば、常葉とともにめづる木なり、こゝに亭あり、浸月の額を小田はらの君かぎ、繞花のは村上の君かき給ふ、二つをあはせて花月亭といふ、げに花の梢をみるはこゝなりけり、寒山の山にある桜ことに高けれども、よその梢にかくれてよそよりはみえず、こゝにてはそれものこりなうみゆ、また月も東山より出るをまづこゝにみゆ、池のさざなみにうかるゝのみかは、春風の池をたてさまに、しらすきのはしまでみゆれば、ことにひろうて嶋々のうかめるさまもかし、亭の左のかたに大なる松池にのぞめり、又いと大きな石あり、青きなかに白きすぢありて樊僧とかいふ、一丈ばかりにめぐり一丈余といふ、亭にそひてたてるに、ばせを打茂りてめぐりそひたるよし、此石をかくいふはいかなるよしも知らず、ある人のいふ、此石を大きなれば門くづして園へいれしよりともいふ、石は左にて右は池なり、山ぶき小でまりなど咲交れり、左のはせにはまた桜ぞつづける、木のもとと菊をうゑぬ、こゝに又関あり、葉山の関といふ、竹いとしげりてをぐらし、それをめぐりて出れば枕流といふ、この亭のまへに澗水のながれしが、今はたえたれど、そのあととはのこれり、このあたりする多くてからめきたり、これよりはる／＼の池の岸をめぐる、左右は桜にて、山吹木のもとにしげり、つはふきハキシベにあり、このそのはことに多し、行先の山も尾もしげれるぞ多き、またあせみかず／＼あり、かの濃州むかしあつめしとかいふ、此道をすべて左の下道といふ、ゆきつくせバ右のかたに道ありて馬場へゆく、それをもよそにしてゆけば、大きな松の二もとありて、板はしをわたる、こゝに桜の淵とてさま／＼の石を

あつめしところあり、そのうへに○のかけはしともいふべき柴はしのたかうかゝれるを、花のかけはしとかやいふ、板はしの中に亭あり、釣殿といふ、これよりみれば向ひは春風館なり、なゝめにみればかの花月亭なり、島々ミゆるもをかし、板ばしをつくせば又右に坂あり、左は浜べにて山ぎはつゝ山ぶきのたぐひおほし、もと桜はすべて枝をならぶれば、みな花をもて名とす、このはまべをしのゝめの浦といふは、有明のうらより曙のころみれば、こゝらのふちのはなうちかすみで、横雲のたなびくやうにみゆれば名づけしとかいふ、又はじめの右にあなる坂をのぼれば、木曾はこねともいふべきけはしき道の竹のうちにあるを、竹を力にのぼりくだる道を竹の細道といふ、それより月とふ里といふあり、馬場の亭なり、嘯月廬といふ、幽篁のうちなり、この道々は花のかけはしあたりへもゆきつべし、馬場は七八十間ばかりにて、東に鳥銃ならふ処あり、左右石にてたゞみて、銃丸のよそへゆかざるやうにつくりしものなり、馬ばの左右は、はじめの木うゑて下にはうぢの茶をうゑたり、このさとより竹のうらを暫くゆけば、秋風の池の向ふなるもみぢの下道へ出るとなり、月とふ里あたりに石ふみありて、初の句は忘れにたれど、春風秋の風吹らん末のそでもゆかしきといふにて、李氏の園よりも高しといふ人もありと也、またこの里をとほで、はまべのかたをゆけば、山の上に遊仙亭といふあり、もとはうぢの鳳凰亭をひなの屋のやうにさゝやかにつくれりしをいれたりしが、塩かぜたゞへふけば、その堂なども破損すればにや、大塚のなかつころへうつして、今は布袋を安置したり、此山を高岡山といふは鳳凰ありしよりつけしにやありけん、高岡山のつゞきのたかき山は、むかし

より風をり山といふ、海よりふく風をこゝにてくじきとむるとの心にや、山のかたちゑぼうしのやうにむかしはありやしけん、今はさもみえず、打のぼれは風神などまつれるやしるあり、たつた山の心ともみえず、されど山のうしろはもみぢうちしげり、前は桜ことにおほし、南のふもとは月とふ里なり、山上山王の林なども青うくまどりたるやうにみゆるなり、その、山々のふもとなるはまべをゆけば橋あり、こは春風秋風の二つの池のなからなれば、二水などといひひけんによりしや、はしをもしらさきとよぶ、そのはしをわたりて春風館のかたへはゆかで、左のけはしき山道をゆけば、山吹萩などしげりたる細道にて、色ねの道とかいふとぞ、その坂は秋風の庭へ出る間道なり、その小みちよりせざる輩は、感応山のふもとにつきて春風の柳の庭にゆくめり、又そのはしをわたりて高岡山の東のふもとをゆけば、ふぢいと多くて、もみぢの下道といふ、このみちいと長し、左は竹のはし右は秋風の池なり、半行あたりに芝はしありて島へ渡る、こゝに弁天を安置す、橋邸のときにかはらず、邸の尊像なり、その島の西北に小島あり、松の小島といふ、又この弁天のしまより東へ出し崎を乙女が崎といふ、ほそく一筋に池に出たる道なり、向ひはいなりのやしるなり、又それよりもほそき道の出しをとりぬが崎といふ、むかし堤ありし処の大なる松、いまもつかの如く高きうへに生ひそひぬ、こゝに小亭あり、操琴屠蘇といふ、この崎にうちにながれてしはいとみちぬれば、こゝよりながれ出るおとゝ松とをあはせて名づけしが、のちに柴ばし出来てよりはさせる事なけれども、松風のしらべとのみぞ今はなりぬる、むかしはそのつゞみ感応山につゞきて、つゞみより島までは石などありておどり

こえてゆきぬ、今の秋風の池のあたりは、よしあしのみしげりて、御池にもあらざりし也、ふたつの崎のあふところにはしあり、そのはしをわたれば、いなりのやしるにゆく、やしるも橋邸のころよりありしがまゝなり、それより池を右にしてあゆめば、かのあしろの床まねびたる尾あり、それをやしるのうらといふ、はじめの柴はしをわたりて、もみちの下道をはるくゆきてもこゝに出るなり、こゝより大海のうしほ此池にかよふ道あり、こゝにまた山あり、さかをゆけば、竹の林にて孟宗とかいふは殊にたけたかう打なびけり、坂をつくせば、小松の〇〇〇うなばらを見る、いはゞうちのおじろみつゝ、山ざとゝいはんとおもふが、おもはずうらわへ出し心地すめり、こゝをなんくづれずのきしといふ、むかしあまたゝび高しほのうちきてくづしゝより、石などもて岸をもつくりければ名づけしなるべし、こゝに亭あり、蓬流をもて林の君名つけしなり、福山の君かきて、ほりしは松ら静山翁なりけり、こゝはつねの亭とおもひて〇〇〇などのひまよりみれば、高樓のうへなり、いかにととへば、過しころ秋風の池のいと埋れにければ、その土をほりとりてもせんかたなく、皆こゝにもてきたり、くづれずの堤もひとつ山となしなば、いとどかたからんとておくまゝに、桜の下のかたはみなうづみて、道は高樓の上のうちつゞくやうになれり、されど樓の南面はかくうづみて、北東のかたは土もらざれば、下よりみればつねの樓なり、これもひとつのみるめとなす、下は竹生ひしげりて、七つのなにかいふ人の遊ぶべきところなめりといふばかりなり、これより竹の林をゆけば、又堤ありてさまぐの名ある竹うゑたり、左にみつゝゆけば、まはぎの関なり、いなりのやしるの前のかたよりゆき

ても、此里路にいつるなり、この里は萩あるをもて名とせり、その関をこえて左のかたへゆけば、尾花の堤とて、左右に尾花打しげりて、わけわぶるばかりなり、尾花のなかに小高き山あり、船のかたちしたれば、ふな山といふ、今はいさゝか処をかへたれど、尾花の波にうかべる船のことおもはる、山にはさまぐの木ふかくおほし、その山をこゆれば、ひろき野に尾花打しげり、中には萩ふぢばかまきちかう小ぐるまなど、ところ／＼に咲まじれり、こは秋風池のきしべの野ばらなり、又かの関より右のかたへゆけば、冬さく菊かず／＼うゑたるに、水仙など多し、こゝに柴門あり、浴恩園の額一橋中将の君かき給へり、海翁の君よりおくり給ひしこの柴門今年柴山て此額か孔雀めん羊などかひおけるもこゝなり、そのきくあるところの左はふぢばはかまのみ多くうゑぬ、花園多くありて、小亭衆芳の額秋田の君かき給ふ、花は牡丹さくやく仙翁花鶏頭菊などさま／＼うゑ置てけり、こゝもまたいとひろく、末のかたはなすさゝげなどもうゑたり、名所の本草のたね年／＼にこゝにうゑて、生たところは太塚のなかどころの園にうつすとかきゝぬ、亭の北は黄なる花と唐国の紫、吹上のはまの白菊とをわけて多くうゑたるはをかし、亭を出れば花菖蒲いとおほくうゑたり、はゞ三間に長さ十一間なり、それをみつゝすぐにゆけば、千くさの園なり、園の左右は桃いと多し、さま／＼の花さく錦の如し、こゝにも蓮池あり、池の上も堤ありて、高潮の折、しほ水をいれじとの料なり、千くさの園は多く薬草などうゑたり、園のなかばより尾花のうちを左にゆけば、秋風の庭に出づ、秋風の池の波よするきしなだらかにして、塩干のけしきもめづらし、こゝをみなと田といひて、いなつくりしが、しほ水通

へば、つひにいまはやめて、みなとだのうらなどくゝりいふめり、尾花の中には松とくゝにありて、二三尺ばかりかこむばかりなり、吹上浦、高砂、田子浦、岸姫松など殊に大なる松なり、もとは肥前の大手手づからうゑ給ひしを、三もとさゝやかなる盆にうゑて賜ひしを、こゝにうつしたるが、三十年余りにかくはなりにけり、ことはめづらしく花もさきにけり、山の上亭あり、秋風の額ひろはしの儀同かき給へり、亭上より池をみわたし、尾花も時そへたるをかし、このあたりの山はみな、つは、ふき生ひしげりて、日なし山などといふ、亭の北のかた小高き所にまた小亭あり、山間なればにや、楽山の文字をかけたなり、亭のうしろに露台あり、のぼればかの桃をみ、夏ハはちすをみる、露台清香の額は東のかたにかけ、瀬春の額は西のかたにかけたり、其亭を辞して口なし山をすぐれば、南は感応殿といふ額ありて、観音を安置す、山の下のまに橋かけて、其橋の下をゆけば、楊柳池のかたへ出るとなり、それをへだてゝ堂あり、仰瞻の額ありて拝殿なり、其山に対してあるを、かざしの山といふ、山の上に亭あり、四時亭とかいふ、のぼりてみれば、東のかたは紅葉の木の間より秋風の池をみ、南は花の木の間より春風の池をみ、西は梅そのの梢をたまもの池のきしなる松のうへよりみる、北は、たまもの山の間なる千代の細道なり、かざしの山といふは、藤さくら山吹紅葉などあればにや、ふたばの葵もあれど夫のみにはいはじかし、額は巻物にして、画にて文字の姿をなす、春は梅さくらの花にておのづから薫風のもじをなし、夏はみどりのうちのおそぎくらの花にて緑陰のもじをみせ、秋は紅葉の山水にて碎錦、冬ならバ松の雪のつもるにて含光となす、げに此山のけしき

よつのときにかよへりけり、亭榭多けれど、まづいはゞ春風館はむかし御殿なりしころよりつたはりしにて、其後やけにしのちも、夫にしたがひてはぶきたれど姿をのこす、花月衆芳はもとつたはりしを引うつしたり、秋風は母上の小室をうつし、蓬流は翁が大任のころ西下といふところにつくりし小楼をうつせるなり、新につくりしは此亭のみなり、もとより事そげたれば、をかしきふしもなきがうへに、日記にもかきたるごとくことにものをはぶきすてにけり、此山の下小池あり、こゝは潮いらざれば賜はりし蓮をうゑしより、たまものゝ池と名つく、さるをはぶきて玉もとはあやまりなれど、池に玉もゝつぎゝしとてよび来りしとぞ、左右のかずゝの山をも、たまもの山といふは、池よりうつりこしなり、此かざしの山とたまもの山の間坂あり、みそぎ坂といふ、こは春風の庭もおりすぎて、藤山吹もちりぬるころ、たまものうつ木など咲出るに、はちすのかをりもすぐしく、木かげなければ夏をことにもてはやすところなり、この坂を下れば桐の林ありて、それを初秋のもりといひて、かたはらにははそなどもたてり、されば夏と秋との行かふ坂なれば、かくやいひけん、昔しこゝにてみそぎやしけん、猶とはまし、たまもの山の池につと出たる処に、かつてにふちのかゝりて下に瓦しきたる処をゆかりの屋といふ、その山の坂をへだてゝ寒山拾得の像のいと大なるをおけり、女わらべなどいとむくつけしなどいふ、この山の西の坂を下れば、色香のそのなり、初め盆梅などうゑたるが、今はいと名残りもなう生たちてけり、また其坂をばくだらで、寒山のふもとをゆけば、左右の山ゝ松のみ生ひしげりぬ、千世の細道とかいふとぞきく、そのうちをゆき過れば、かの蓮の池という

かのそのなり、これよりくだもの林とて、かきなしりんごすもゝな
 どいとおほくうゑし処をゆきて、また色香の園に出るなり、こゝに
 小亭あり、琴雪堂といふ、堂の北のかたに大なる松あり、園中第一
 番といふ、高さは一丈あまりにて、東西四丈、南四丈四尺、北二丈
 五尺、四尺余りのかこみなり、臥龍のすがたをなす、松を琴とし梅
 をきつきの雪として亭に名づけゝん、松のかたはらにいと大きな
 霸王樹と、きりんの〇あり、この池にてはみしことなしとぞいふな
 る、是を合せて三〇園ともいふとかいふ、その霸王樹のうしろはい
 とうちしげりて、つばき山茶花もくせいなどいとおほし、一位の君
 よりたまへる椿三もとうゑたり、それにそひて竹もてつくりし小亭
 あり、このしげりたるそとはひろき芝野にて、早梅多くうゑぬ、中
 央にあるを立冬梅といふ、冬至などいふたぐひならず、青葉あるう
 ちに咲出るばかり、此をなん春しる里といふは、早梅多くあればな
 りけり、かのそのゝ南は春風館なり、額は加茂の甲斐のかけり、こ
 は我朝紫宸殿の御額かいたる書博士なり、此館〇〇のすのこは池に
 のぞめり、館の東の小室を楊柳亭といふ、此池はかのたまもの池よ
 りつゞきたる小池にて、さくら柳まじれり、感応仰瞻山をみる、い
 でこの館は園中の高樹の第一なりといふ、左のかたには花のみはし
 桜が淵をはるかにみ、南東はしのゝめの浦をみ、西はかのいろ香の
 園より有明の浦、それより鳩の通ひぢなどのしまゝをみるなり、
 釣このめるをのこはけしきもみずしてつりするもあるべし、色かの
 園の南館の西は有明の浦といふ小島あり、様々のいろあるものをう
 ゑたれば、錦島といふ、こゝより石を躍りつゝゆくなり、こゝを鳩
 のかよひぢといふ、げにしほみちぬる時はをどり行くべき石もみえ

ずなん、又こゝにはしあり、八こゑの橋といふ、はしをゆけば、と
 きはじまといふにわたる、大なるそてつのあればなり、又橋あり、
 千代の長橋といふ、わたればそてつ三もとばかりみゆ、これをは
 〇〇〇島とかいふ、大なるのは大洲の長はまといふ処の亭にありし
 が、その亭廢して不用となれば贈りこしたるなり、〇〇〇のは房州
 又は八丈のとかいへり、島よりもどりて色香の園をゆけば、橋あり
 て松濤深処の額かけたる門にいる、

*初句は（なれ／＼しそのゝ）なり

18 大名屋敷のオープンガーデン

「十方庵遊歴雜記」四編之上
 釈敬順著
 文化十一年（一八一四）

第拾貳 松平大学頭の林泉の逍遙

一、松平大学頭上屋敷は、小石川に隣りて大塚吹上といふ処にあり、
 屋敷の方量三町四方もあらん、毎月巳の日は庭をひらきて諸人に見
 せしむ、頃は文政戊寅の年五月下旬、館万鯉池田山鼎を伴ひつゝ富
 岡亘は予か茶事の社中なれば、兼約して罷りぬ、此日巳にして庭前
 の弁天へ参詣する族多かりけり、即黒田春齋案内して館の北なる庭
 門を入林泉にいたる、此屋敷西南は高く東北は低き中にも、北の方
 はいよ／＼ひくし、されば庭先の門を入左へ折まがりて馬場にいた
 る、馬場南北の長さ数百間広さ七八間、此両側の土手みな桜なれば、
 花の頃は嘸かしと思ひやらる、左の方に茶亭あり、その様市店の水

茶屋に作れり、爰に古碑あり高さ四尺余前幅貳尺計、延宝三年とありて文を鍛付たり、くだくしければうつさざりし、文政元戌寅年に至りて百四十四年におよぶ、西側の高みに三階の高樓あり、是四時折々のながめ遠くは、小石川氷川明神の坂より御薬園の辺迄見はらす事になん、されば馬場の末より左りへ登り東南の広き平原にいたれば、梅林あり数百株みな異にして夫々に名あり、実熟して枝々に満り、花の頃はいかゞぞや、花形紅白さま／＼なれば梅屋敷などの類にあらず、花の頃はあはて残り多し、此平原を北へ下り又右へそひて山へ登る、此処極て高し、即北は御薬園より、氷川明神西は猫股坂より鈎播山スリヘチのあなた、本村の民家田畑も一望の中にありて、氷川の下路を往来する男女、又は暇路を行過る人迄、凡見渡す処三町計程能風景一品なり、此山の半腹より下裾通り一円に山吹なれば花の盛はいかならん、斯て山をくだり右へそひて或は登り又は下り、朽なる踏越などあるを過て池辺にいたる、是より橋を越へ池中の辺に逍遙するに、松の屈曲せし様得もいはれず、又西の方なる茶亭は池を打趣て眺望するに、躑躅のはなの燃るが如く、紅に真盛なるは優におもしろく、又南の方は山の峨々として雑樹繁茂し、水隈のいさぎよき此地東西一町計南は貳拾四間には過し、水漫々としてたゝえて東の方へ流れくだる、斯高き土地にも水湧出して早魃にも水減せずとなん、つたへいふ此池中に主住て昔より度々死亡せしといふ、或は水虎住ガッパが故に水減せずと人失カセるよし、とり／＼巷談す、扱中島に弁天宮あり宮は小さしといへども、巳の日なりければ池頭に大幟をたてゝ、藩中の男女思ひ／＼に参詣せり、頓て元来し橋を越つゝ北側の池辺をめくれば汀に藤棚あり、長貳拾四間、棚の高さ

七八尺花を見ざれば論じがたし、西の方に茶亭ありて鎖したり大さ六七間なり、春斎指さしいへらく、山吹桜藤の頃は此茶亭に度々諸侯の客来あり、既に過日迄は躑躅真盛なりしまゝ、数度此亭にして日終人々宴遊ありと物がたれり、実も此処躑躅夥しく山に蹊コミチにつゝじならずといふ事なし、此日花うつろいたれど、茶亭の濡担に憩ひて人々の顔面を見れば花に映して各赤し、是より躑躅の小坂を登りて左の崖際に方式間計の石垣のみありて葎ムグラ生て草茫々たり、是は昔光圀卿の学問所にし賜ひし書斎の跡なりとかや、実も此処は庭中とはいひながら館を遠さかる事四五十間、只松風の音のみ聞ふ、林巒の中なれば寂寞として書籍を見て、心を澄しむるには一段の場所ならん、此処より右の方閑道を過て元来し馬場先の茶亭の前へ出けり、此日迎暑の折からなれど諸木繁茂し、風冷かに隈々まで見めぐりて逍遙せり、左はいへ上にもいふごとく、それ／＼の林泉よしといへども第一は狭く、諸木作り攪めて景色拵しものなれば、天造の風景に比すれば、同日の論にあらず、まだしも賞すべきは染井なる甲斐守林泉ならめ、此庭広さ凡五六町四方、山は幾重となく波濤の如く築立、川あり平原あり、此家堂宮あまたありて、自然の山林の景地にあそぶ心地せられ、連立友を見失ふもの間々あり、唯眺望の床敷は天然の風色にぞ、

19 年中行事と大名庭園

「十万庵遊歴雜記」二編之下

釈敬順著

文化十一年（一八一四）

四拾参 木下家の糸桜内裏ひいな

一、東武麻布広尾木下肥後守の上やしきには、毎年三月朔日より十日まで、さくら見物として諸人を許し入て見せしむ、その場所は広庭の真中に一株の桜の古樹あり、高さ凡六七丈幹の太さ三抱余、枝の四方へ垂茂せし事二十八間づゝ、糸桜にして花やさしく色又うるはし、此樹一株にて大方に広庭を覆ふ、遠くしさりて見れば更に花の山の如し、枝又悉くしだれておのゝ枝先へ手届けり、故に来集のもの人矢立取出し、こゝろゝに腰折など申捨、懷紙にしたゝめ結付るもありけり、武城の内にかゝる大木の糸さくらある事なし、此外に広庭の中には連翹^{レンギウマキ}の樹など二三株あるばかり也、男女押合へし合群集して見物す、但し庭口の門に司役の若侍出張して、銘々の腰の物を預る事也、

一、広座敷に毛氈を敷詰て、むかし太閤殿下より淀どのゝ拝領ありし、内裏ひいな壺対をかざり置てもろ人にみせしむ、大さ人の座したるよりも大きし、雛の装束はその頃の時代金襴にして実に賞すべし、総てひいなの大き成は凄涼^{スゴキ}ものなるに、容貌柔和にかわゆらしき古今に独歩せしは、名たゝる雛屋の作りしものならん、此壺対の雛にて三間半のざしき大方にふさがれり、後世の今は高さ八寸の内裏^{ダイ}雛の外はひさぐ事なし、豊臣殿下の時代は花麗に、人氣も寛活と

思はる、嗚呼世の中のくだりたる事を、

第三節 庶民の造った花名所

20 寛保二年、新吉原仲之町茶屋の軒並に石台の桜を置く

「新吉原略説并元吉原町起立」第三帖

中村仏庵著

十九世紀前期

関連図版17

（前略）三月中桜を植ることハ寛保元年辛酉三月廊中より願ひ出たりしハ、中の町茶屋軒なみにせき台^{ダイ}植の桜を出し置たきよし願ひたるにそのこと叶ひ、さて翌年より初て中の町へ植ることゝハなりし（後略）

21 植木屋伊兵衛桜を吉原に売る、草木すらも苦界はありけり

「俳文拾遺」

小林一茶著

文化九年（一八一二）以前

関連図版17

廿一日 随齋^{ずいさい}と共に、三河房の幽棲^{いうせい}を訪ぶらへる日、植木屋伊兵衛が畠を過るに、桜はけさなん吉原上巳^{じやうし}の料^{れう}に売遣はしけるとぞ。草木すらも苦界はありけり。斯^かかる時にや、花も涙をそゝぐらん。

花の悲しくやあらん。

花掘し跡をおぼへて風の吹く

花咲と直に掘らるゝ桜哉

22 庄屋の造った牡丹屋敷

「十万庵遊歴雜記」五編之下

釈敬順著
文化十年（一八一三）

参拾四 上北沢村庄屋鈴木左内が牡丹

一、武州荏原郡瀬田がや領上北沢村名主鈴木左内といふ者、近年牡丹数株を作り、江戸四季巡覧をも出板し、都鄙の貴賤道を遠しとせず逍遙するよし、世上の風聞区々なれば、いでや今年こそぶらめき見物せんと、卯月十五日朝餉したゝむるや否、腰提及び煎茶の具など取揃つゝ、圍違し同伴は面倒なりと、独行に杖をたのみ、午の刻過頃に彼所へこそは行着ぬ、その路筋たるや、四谷信濃殿町辻番より右へ入、御焰硝藏御用やしきを過、千駄がや千寿院門前より左へ添て、青山恩田の耕地通り、三熊野権現まへ凡弍十余町を経て、白金の大還道源坂の通りに出ぬ、小日向よりこれまで行程弍里なるべし、その路すがら田を耕農夫、餅草摘女、青麦の穂の出揃ひし、卯のはな、木蓮花、山吹、蘇枋の花など路傍に咲しもめづらしく、右に左に風景見洩さじと独行気任せは、耕地の畛に杖をとゞめ、火口にたばこ吸ながら、やうくにして道源坂にさしかゝりぬ、是より行先いまだ弍里ありと巷談す、かゝれば丈夫に四里余はあらんか

し、往返八里に遠き鄙てくだくしき路も却て古雅の趣きあれば、己が心には面白く、既に道源坂を上り尽して右へ入、駒場村御用やしき前を過凡二十余町にして、北沢の淡島明神の巷にいたる、此所に食店酒楼両三軒ありて飢を凌ぐによし、是より左の路ぶらめき行に数十町に赤月村といえるに、名主小左衛門とて外構長き事六七十間、垣は黄楊の樹を刈込て行儀よく美しく綺麗なるは、最めづらく片鄙の一品といふべし、是より又数十町にして上北沢村の巷陌にいたる、右は四ツ谷通りの大還たり、則ち左へ行に左側に益田の、池弁財天といふあり、一株の景松は弁天の島に生じて、枝先は往来の路傍に出で、年古し老松と見ゆ、島には白き琉球つゝじといふもの繁茂して、由縁ある古祠と覚ゆ、是より数十歩にて左内が外構の堀に至るに、小構に吹し杜若のいさぎよく、既に左内が門前にいたるに、住宅は右にあり、牡丹は往来を隔て左にあり、上には雨障子をかけ、四方は葭簀にて囲ひ、東西十三間南北六間、中に一の花壇より第七の花壇まで、凡三百八拾五種の花は、花みな別々にして一種といへども尋常ならず、奇々妙々感賞するに余りあり、愚老もかほどの事とは思はざりしに、実に目をなぐさめ心を悦ばしめて、吾妻屋の濃艶亭に憩ひて時を移しけり、花の名寄は下にあらはすが如し、猶又接穂咲わけの牡丹五本ありて、おのゝ樹の太さ根本にて七八寸廻りと見ゆ、彼尾久村玄琳のぼたんは物の数には、その要脚の費年中の丹誠、中々及ぶべき事にあらず、取分第一の花壇の六本目尾山などいふ花は、聞も及ぬめづらしき名花なりき、その外只記憶にのみありて書取難し、花壇七ツおのゝ長さ十間幅壹間づゝありて、土留の簍より花名の札葭簀手摺にいたるまで綺麗なる事言

語にたえて、見る程の人感賞せずといふ事なし、扱又牡丹畑の前通り大還を西へ通行すれば、四ツ谷筋に出るとなん、此往來の路傍に葭實團の出茶屋ありて、蕎麦切栗餅七色茶漬団子菜飯田楽屋の徒必至と居ならびて商ふ、既に南の方高みには目立食店を造作して諸侯大夫の歴々の憩ふものあり、路すがらは見物の人も稀々なりしが、此処へ来り見れば男女の見物群集する事、開帳場の如く限々の茶屋酒樓みな人ならずといふ事なし、予も傍の茶店に憩ひ渋茶を喫して渴を除き、往來の人々の風俗になぐさみ、四方の景望を愛す、然るに此茶店の小婦が二十歳に近き年頃に見えながら、齒も染ず島田髷にエゴ／＼と肥満したるは、狂じて例の悪発句を吐く又一興たり、但し獅子にぼたんと聞ゆるや否や、一笑／＼、

ほたん見や鄙のむすめのふとり肉

以風

斯て、左内が住宅へ案内して、内庭に秘蔵し造り置る絶品の牡丹を見たと問糾せば、料理申付ての上ならでは主不興のよし、勿論食店ならねば表向は支度を頼と申入て、一鉢三人式百疋位に挨拶するよし、振舞の品々は何にても望みに応ずるとの事、斯せざれば心よく見せぬ風聞なれば、風流にあらずと案内せで止め、いかにも門内を指覗き見れば幾群か座敷／＼に衝立に席を仕切て食したゝむる人若干にして、勝手には魚洗ふ男、庖丁する人混雑に見えたり、猶又西隣家なる水車屋の藤棚は、長さ廿壹間幅式間花の長さ四尺余あり、是左内が舎弟の家なれば、見物の人々に支度振舞つ、手管の手段は左内が宅の如く、推売に似て甚雅を失へり、本所新梅やしき鞠塙が、たづね来し人の足元を見て、物売付錢ほしがるよりは十倍増

すべし、牡丹の手入はいかにも賞すべく、主が風流なくして金銀を貪るは憎むべし、嗚呼いろ／＼の人ごゝろや誉る人譏る者一准ならぬも又面白し、唯見度は当処密藏院の彼岸さくらは、樹の高さ六丈東西に枝繁茂する事十二間南北十間、樹のめぐり壺丈といえり、来二月逍遙して書記さん、長日とはいひながら往返八里に近ければ、老足に心せかれて見返／＼元来し路へ立もどりつゝ、道源坂の大通りより青山善光寺前より六道の辻を過、四ツ谷へ出て帰宅しけり、上にいふ左内が牡丹ばたけの名寄左のごとし

第一の花壇五十九種 裏表に植て長さ十間幅壹間二側

冷月 玉珊 花玉蓮 大内姫 裾濃威 尾山 十五城 由良戸
松友 恋時雨 浪の旭 阿房宮 笑獅子 長生閣 韓寿紅 寿き
男石 紫雲城 雪下潭 太平雀 四の海 乙女紅 玉珊集 御萩
川 春湊 名取川 綾の上 無口笛 芙閣蓮 鵜鳥 須弥山 鏡
台山 御簾糸 紫金閣 還城楽 藤ヶ枝 申九印 遠寺山 金毛
東鏡 室の戸 豊の明 今出川 玉椿 滝の音 文附日 連歌時
雨 西王舟 探桑老 八十島 薄絹 青覆輪 飛龍格 塩烟 西
艶台 金梁台 運旭山 日暮 姿鏡以上

第二の花壇五十九種長さ十間幅壹間二側

鎌田藤 東先 小式部 銀覆輪 代々撰 春の曙 玉天集 貴玉
蓮泉図 雪の上 松兎島 朝霞 雪の翌日 高台 瑠璃盤 松の
雪 風の音 定家 天印 東海 妹背山 桜鏡 鵜の羽 風波山
美少艶 文字摺 御所車 玄上紅 千里浜 大海 麗日 氷室山
藤乙女 金杯雪 大花山 天の暈 鹿毛錦 墨流 建章宮 初瀬
山 錦島 藤島紅 四方底 無一物 金覆輪 獅子ヶ峰 慎立山

吮喉紅蓮鶴 八ヶ代 田毎 色千染 朧月 伽羅戸 甚紅鏡 獅
子吼 濃岩戸 玉簾 黄鶴光以上

第三の花壇十七種一側

波枕 千歳 音羽山 八重垣 広ヶ浜 真石鶴 人丸 絹笠山
五台山 松風楽 往来関 亀戸城 雪の松 唐崎 美人酔 瑠璃
紅 普賢象以上

第四の花壇十七種一側

千代重 大鵬 鳳凰閣 金冠桜 三千秀 玉井蓮 四百余州 染
絹 鳴戸 仙桃閣 国常 色宿り 八乙女 彩鏡 藤細絞 善知
鳥 桃色千里以上

第五の花壇五十九種二側

難波獅子 代々雪 唐織 武者 墨龍 野守鏡 豊部山 越女裙
不可思議 白鶴 更科 立花 八重蒲 芙蓉紅 雪の窓 初恋
下染 小夜時雨 百花頭 和光山 須磨 黄金台 迎日 谷間雪
芦田鶴 袖照し 花橘 西宮宴 想夫恋 曙 安養寺 百夜車
羽衣の袖 万代 龍車 若草山 弓張月 五採桜 蒼龍窟 夕鹿
子 金鳳 乱獅子 駒嶽 錦島 帰去来 陽比山 別龍 明石湯
蜀江錦 雲紫 関嵐 思の儘 東芳海 入日の海 柴舟 朱呼紅
四神相応 日出鶴 武溪陵以上

第六の花壇五十九種二側

若紫 色の関 藤造 大白山 荒玉 黒木御所 染絹 染殿 錦
の袖 水無月 さゞれ石 唐竹 麒麟角 三国 沈香亭 廿ち山
八百紅 錦紫帯 飛鳥川 大曲 越路 都富士 笑隠し 光運山
樹下 和田が原 移し心 無辺際 玉常 織錦 青州白 膝王閣

呉竹 代々渡 南明紅 綾羽 七小町 三笠山 亀紅 月桂 洞
入獅子 日の始 富士城山 金翅鳥 塞河鷲 色王集 秋津洲
玉露山 随一紅 志摩浦 大和歌 涼兔 墨田川 楓林紅 初染
御代松 龍門 玉守り 鈴尾以上

第七の花壇四十七種二側不残実生

一、接穂咲牡丹五本、樹の太さ各七八寸廻り高さ各五尺余、樹の
幅四尺余より六尺まで、猶左内が内庭には数種の名花のあるが、
中にも朝鮮国より将来せし絶倫の牡丹あるよし、慥に聞しが料理
喰ずしては、推強で見にくきとの事故案内せずして止め、
右あらはす如く、四百種に近き数々の名花を造りしは東武の莊觀た
り、愚老がむかし十九や廿歳の頃は西が原の牡丹とて取はやしけれ
ど、中々左内が三分一にも及ばず、今は只名のみにして尾久村も、
鞠塙がばたんものゝ数かは実に賞すべし、左はいへ片鄙なれば武
城の人々八分はしらざる者多ければ、見ざる人甚若干也、大久保百
人組飯島武右衛門が絶品の映山紅をしらずして、見ざると一對とい
はんか、嗚呼残多し、

23 亀戸梅屋敷臥龍梅の由緒

亀戸梅屋敷之事

一梅屋敷之梅、七歳之童実植いたし候処、増長して往年之年、藤堂
家ニ買求植候処、不宜事も有之、梢枯牀罷成、元之梅主江返り又

「御場御用留」上巻
寛政八年（一七九六）

植候処生茂候由、梅主ハ喜右衛門与申実躰成もの二而、亀戸村之内与兵衛と申網差有之退役被申付、其跡江右喜右衛門、享保十三年四月廿五日、網差被^(関字)仰付

一右喜右衛門家作之儀、享保之比ハ殊外小躰ニて、古キ小家ニ而昼も鼠多出申候、花盛之節ハ梅見之男女等、椽之上より枝を取、短冊を付申候程近ク家居有之候、二代目喜右衛門致家作弥賑、毎々方梅もはひこり申候

有徳院様

一元文元辰年九月十三日、亀戸辺^(関字)御成之節、普門院ニ有之候^(平出)

大猷院様^(関字)御腰掛跡上覧、夫方梅屋敷江初而被為^(関字)入、喜右衛門方

江御腰掛^(関字)御小休有之候、其節梅屋敷之木ニ天下泰平ト虫喰候跡有之、^(関字)上覧被為遊候

一同三年六月、亀戸臥龍梅之実初而差上候、御金貳両貳分喜右衛門江被下、夫方年々^(関字)御本丸・西丸江差上申候

一宝曆七丑年三月、病氣願、網差退役仕候

24 本所梅屋敷臥龍梅

「十方庵遊歴雜記」初編之中

釈敬順 著

文化十一年（一八一四）

関連図版9

六拾貳 本所梅屋敷清香庵喜右衛門

一、武州葛飾郡本所梅屋敷は、亀戸天神の東北三四町に有、昔享保

年間^(関字) 有徳院君、御愛樹の梅を爰へ預け植置しめ賜ふ処也、此梅古木にして地上に横たはる事凡五六間枝高き処壺丈に過ず、庭に這て成木し花の咲し形ちは、恰も睡れる蟠龍に似たればとて、臥龍梅と号け玉ふとかや、花少し薄紅にし匂ひ又尋常に非らず、根元の太サ五尺余されば、此梅屋敷広サ四町四方、春は暁月^{スウゲツ}の余寒もいとはず、いまだ花綻ひざる頃よりも、都鄙の貴賤集ひ来り、床机も狭しと宴遊せり、別して近年園中明間もなく、数万株の梅樹を植込たれば、今は恰も梅園といふてかならんかし、さはいへ限／＼迄咲揃ひしは、香風衣裳に含み、飛花空中に翻り、雅客文人爰に逍遙して日の永からん事を思ふ、一箇の壯觀と云べし、立春より三十四五日の頃よしとす、但し年の寒暖によりて遅速有り。

一、やさしき守を清香庵喜右衛門と号せり、此宅にて臥龍梅の漬物成とて、梅干をひさぐ、年中斯の如し、買求るの徒又夥し、是れ臥龍の梅干に非らず、又園中の梅の実も夥しといへ共、中々年中ひさぐ程は貯ふべからず、是小伝馬町より梅干を仕送る者有り、たとへば日本橋本船町、小田原町辺にて鮑^{アヘヒ}の落貝を酒糟に漬込て運送するを、相州絵の島にてひさげば、東武の人しらずして名産と心得求め、又東武へ土産にするが如し、見ぬが極樂、しらぬが仏の諺もあたる哉、さはいへ花よく咲^{ユキナ}をなし、又能く人を呼といへる本文は、此梅やしきの事にぞ。

25 亀戸の清香庵、梅屋敷と称してその花一品なり

『江戸名所図会』巻之七
斎藤月岑 他 編著・長谷川雪旦 画
天保五〜七年（一八三四〜三六）

臥龍梅 同所清香庵にあり、俗間梅屋敷と称す、其花一品にして重
弁潔白なり、薫香至て深く形状宛も龍の蟠臥か如し、園中四方
數十丈か間に蔓て梢高からず、枝毎に半ハ地中に入地中を出て枝茎
を生し何を幹ともわきてしりかたし、しかも屈曲ありて自其勢
を彰す、仍臥龍の号ありといへり、梅譜に臥梅・梅龍杯いへるに
かなへり

（中略）

梅屋敷

白雲の龍をつゝむや梅の花 嵐雪
如月の花盛にハ容色残の雪を欺き余香ハ芬々として四方に馥、ま
た花の後実をむすふを採収て日に乾し塩漬として常にこれを賣ふ、
味ひ殊に甘美なれハこゝに遊賞する人かならず沽て家土産とす

26 隅田川堤近くに蝸盧を結び、四時の花を植える

『秋野七草考』上冊
佐原菊塙 著
文化九年（一八二二）
関連図版 11

七草考序

爰角田河は武州第一の勝地にして、春の花、秋の紅葉、月の宵、雪の朝は更にもいはず、常にむかふに、其眺望あく事なし、行水ハ底清くして其流いとなだらか也。のほす舟下す筏、すべて絵に似たり、西には不尽雨降の山を望、北には小筑波二荒のミねを見さく、彼山々をりとして白雲にかくろひ、或は半あらハれ、或ハ霞にこめてほのかに見わたされ、あるひはくまなく晴れて手にもとりつべくなど見わたされ、いつかハ見るにあくことあらむ、かのもろこし西湖にも、をさ／＼おとることあらしとおぼゆ、しかのミにあらず、いともしたゝかなる旧跡なりけり、古今集に在中将の、いざことゝはんといへる哥の、はし書にいふ所の隅田河、すなはちこゝにして、菅原氏の女の紀行には、あすた河とかけり。今須田といへるハあすだのよこなまれるになん、梅屋鞠宇がさがとして眺望にふけるの癖あり、此角田河の堤をいくらもさらずして蝸盧を結び、彼孤山の和靖が貧にならひ、梅三百六十株をうゑて一樹を一日の用にあつ、みづからたれりとし其清貧を楽しむ、あしたに長流水を吸て、茗を煮て窓のうちに閑坐し、ゆふべに杖を曳て池のほとりに逍遙す、園中四時の花あり、時として句はぬことなし、籬の小草のもえ出るよりして、砌の落葉の霜に埋るゝまで、いつかハ心ゆかざるべき、梅のころはさらなり、中嶋には桜かへで、池にははちす河骨、岸には芳宜山振、軒端には藤ぬるで、垣根には菊卵花、遣水にハ菖蒲かきつはた、秋の千ぐさハすべていづこといふべくもあらず、其外万葉集によめる草、毛詩にいへる木、数あまたほりうゑて四時のもてあそびとす、かゝれバこそ、家の名を梅が屋と呼び、園の名を百花園といひ、又の名を秋芳ともおほせしにはありけれ、をりにつけて鳥虫

なけり、鳥ハ鶯きゞす、郭公、くひな、呼子鳥、虫は、蛙、せみ、きりぐす、鈴むし、まつ虫、すべてなかなぬぞなき、さればいつをまされりとし、いつをおとれりといふにハあらねど、春の楳は、園中第一の奇観とやいはん、秋のくさハ、園中第二の好景とやいはん、此花づくりの翁園中の本草を子のごとおほしたつるまゝに、おのづから木くさのことども、考へ出せる事はたすくならず、其くさぐさの中よりほり出たる秋の七くさの考、やがて一卷とはなりにたり、そも／＼この秋の七艸よ、春の七くさにむかへてかぞへいだせるやうに心うる人もあめれど、さるにはあらざるべし、春の七くさハもろこしの書によりて邪氣はらふ為のものなるを、秋のハ、万葉集に載る山の上の大人の歌にいへる草の名を、かきかぞふれば、やがて七草なれば、後の人の七くさとハうちまかせていふ也けり、さてこのふみは、花作の翁がさがしらにハあらず、すべて唐の大和の書どもを考へあはせて、まれ／＼にハこのをきなが僻案をもちいつけつゝ、花に心やれる遊人の道の葉にもがなとて、物したるになんありける、さハいへ、此花づくりの翁が、草養ふいとまのすさびわざなれば、いミしきひがことどもぞ侍るめる、此ふミ見給ハん人／＼、よく／＼たゞし給へかし、よく／＼ことそへ給へかし、といふことかくなん

文化九年三月

手野常山

27 能も斯は工夫して四時の草々を集めしもの哉

「十方庵遊歴雜記」三編之上

釈敬順著

文化十一年（一八一四）

関連図版11

式拾式 寺島本田新梅屋敷

一、武州葛飾郡本所向島新梅やしきは、白髭明神の土手下東三町余により、その途すがら寺島新田の万助を松の隠居と称し、一犬影を吠て万犬声に吠ゆるの習ひ、為差松にはあらねど、人々松隠居といえるも可笑、勿論住居の双方に泉水を湛築山を構え、拾壺階九階七階に振よく造れる松三株、面も大木なるか彼方此方にくばり植、其外松の樹数株ところ／＼に植込て庭の模様を操とり、其余は雑樹又は景石を据て風情を見せしかと、その趣天然にあらず、松隠居とは不^{イカシ}畏の様なるべし、人しらずといへども、百姓太助清八が類ひ松拔群ありて、屋敷の構又三増倍庭の模様殊に天然の雅趣ありと賞すべきもの也、万助の庭及び松の作り樹何さして賞するに足ん、惣て葛飾の一郡は土に合にや、松樹には富る土地なれば、かばかりの庭は若干あるべし、猶万助が屋敷の前に、今最中家を普請し庭を作れる者は、今年乙亥の季秋より菊花に名を高ふし菊隠居と取はやされん用意とや、類を以て爰に集り己名を売て一家をなし、世上に讃^{ホメ}られんが為也、嗚呼名利の人慾今にはじめぬ事にぞ、

一、新梅屋敷は、松隠居より北東壱町余その構凡式町四方も有んか、表向は百姓平兵衛と号し、本名は道具屋の喜多平とて仙台出生の野

夫たり、是は文化二乙丑年百姓地面貳ツ三ツを一円にし梅園に植込しか、元道具商売の馴の果なれば、武家に名染多く仲間広く、俳優の徒に得意ありて、自然と梅林の寓居を訪ふもの少なからず、年を追て人集ひ来るまゝに、文化六庚午年より春秋の草花を植込、地面広ければ詩経の菓草八百余种、その外秋の草花残処なく、萩、木槿、桔梗、荊苳、女郎花、常夏、仙翁花、観音草、ふじはかま、日々草、蝦夷菊、益母草、小車の花、炙花、紫苑、水引、大蓼、野菊、鳳仙花、白粉花、薬鶏頭の類まで、蓮池を挟み左右前後悉く植尽し、その間〱小径幾筋となく曲れる直なる登るあり下るあり、或は池辺に出又は叢林に入て、更に広野を漂が如く、小径に迷はしと思ふの心地して佳興又一品也、殊に処〱に数寄屋めきし野亭四つ五つ建て、広きあり狭あり四方の園中を眺望するに、去とては優にやさしく、秋の草々の花の真盛に咲開けし風情最やはらかに、実や米庵が春秋庵と額に認めしも理かや、早春は梅林の香をなつかしみ、仲春の季よりは数百品の牡丹に入相を託ち、秋は七草及び詩経の菓草に目を悦ばしめて、此方の野亭に座し彼方のあづま家憩ひ、爰に遊び彼処に興して我人家にかえるの時刻を忘る、能も斯は工夫して四時の草々を集めしもの哉、池中には紅白の蓮あり、杜若、河骨、澤潟、花菖蒲、花がつみ、萍の花は水影の色を競ひ、丘には夏咲花の草木数を尽し、又処々に楓楠等の染る木立も見ゆれば、頓てもみちの頃を思ひやりぬ、実に四季折々の詠め三賞の美景は足んぬへくぞ覚ゆ、唯恨むらくは此園の菴主住居といひ、形容は風流に見え落髪して、名を百花庵鞠塙と号し、梅の隠居といふと雖、幫間にして更に雅人にあらず、今の世の鮎売の形ちを大きくせんとて、飯をひさ

ぐが如くに似たりと雖も意味は甚異なり、既に此菴主鞠塙、過し文化三四年の頃は、己が娘に薄茶点させて来賓をもてなしけるまゝ、諸客しほらしとて一旦は梅園を尋ね逍遊せし族もありしが、誰いふとなく甘塩のサンマと異名を付ぬ、此ころはサンマの焼匂ひは旨けれども元来下品の魚なれば跡口ころ能らざるが故に、下主の外食する人なし、彼娘点茶の手前しほらしく取廻し二九からぬ年頃なれど育賤しく心立姦しく又鞠塙は担るべき含まれば、極て跡口むづかしからめとて、斯は異名に呼て評判あしく、人足も遠退しが、元来道具屋の果なれば、市宿となりて道具会を興行し、素人まじりに化市と号して、凡先本銀一匁の直打あるべき品と見れば、発句に拾匁と糴はじめ拾匁の品よと見れば百匁と糴はじめ、又百五十匁の通り直はあらんと見れば、一貫五百匁と糴初め、外みな是に准しぬれば、素人及び馴たる族は、不慮に直乞して高直に買取もありけり、然るに此会段々超過して芸子の樹登又は金銀小判小粒南鐐等の売買等以ての外不届の儀出来し、永井来且は豆州大島へ謫せられ、段々御吟味の処いかゝいひ抜けん、鞠塙は不思議に申披たち彼が娘も新よし原町丸海老やへ縁付、今斯安穩に梅の隠居といはるゝ事幸運とやいふべき、左あればかゝる幽閑の園中に起臥する身は、速に名利のころを離れ、幫間を止めて清貧に四季の風光を樂まば、実に梅の隠居ともいふべきに、哀むべし氏より育の諺茶事も少しは弁え住居といふ形容のみ風流めきて、唯強欲に座敷借人のあれかし、花呉る客のあれかしと他出もせで、見物の人の風体を胸算用して渡世するは、隠者の贗にして喩はゞ、鳥さす男と放し鳥商ふ叟と、穩婆と子墮しの嬢と、或は蒲焼屋と放し鰻と、神樂舞ふ神女と口よ

せを業とする市子^{イチゴ}と、扱は工者の医師と下手の竹斎と、誠の武士と二本差と似たる事は似たりと雖、その意味は甚異なり、庭も住居も及ばざれど、風流は松の隠居にあるべきか、殊に庭中の茶店^{クラゲ}二ヶ所あれども、その煎茶の庵悪なるは鞠場が庵に憩えとの手管にや、園中は愛すべし、菴主には会すべからず、こゝろの卑劣不風雅なる、されど人喰ふ馬にも会口^{アイクチ}として親しむ者もあるらん、嗚呼まゝの蝙蝠の飛かふに驚き、懷紙に認め野亭の根押^{ナゲシ}に張下たり、前書略す、

秋のゝや花いろゝの人のゝろ

28 植木屋宇平次、千駄木団子坂花やしきに梅園をひらく

『増訂 武江年表』
斎藤月岑 他 著
嘉永五年（一八五二）記事
関連図版13

○二月十九日、千駄木七面坂下紫泉亭^{植木屋宇平次といへる旧家なり}梅園をひらく、又四時の花を栽、盆種の艸木を育て、崖のほとりに茶亭を設け眺望よし、諸人遊観の所となりて、日毎に群集するもの多し

29 団子坂植木屋宇平治、土地の潤いのために梅林を作る

「老中阿部伊勢守宛町奉行上申書」
池田頼方 作成
嘉永五年（一八五二）
関連図版13

一 谷中俗ニ団子坂植木屋宇平治方江当春梅林^{（本書「出来」}、花盛之頃見物入賑^{（本書「入」}ひ近辺茶屋向相応ニ客有之、土地之潤ひ相成候由、尤梅而已ニも無之四季ニ人寄致し候趣向ニ而、桜菊茶花菖蒲其外植込庭之模様器用ニ出来致し候故、当節迎も見物之絶間なく、素方辺鄙ニ候得共、以前は谷中茶屋町ニ売女有之往来多く候ニ付、商人共渡世も有之候処、取潰相成候後至而衰微致し候ニ付、右場所出来候ハ、土地之潤ひ可相成と宇平治并同所玉屋と申もの同意致し、多分之入用才覚致し庭向取建候趣、

此儀再風聞之趣ニ而は本文宇平治は下駒込村百姓ニ而植木渡世致し、右場所凡三千坪程之内、八九百坪は御鷹餌鳥受負人本小田原老町目七郎兵衛店東国屋伊兵衛江十年前中貸遣、残り二千坪余并同所統千駄木町地所、間口拾五間半奥行十間余之地面建家共当正月中九十両程ニ而買取、町並表之方は貸長屋又は自身建茶見世ニ致し、奥之方は座敷向四五間并風呂場等相建、一円ニ梅桜其外四季之花もの等植付候儀ニ有之、去亥十一月中より取掛、当二月中落成致し、同十九日庭開より殊之外見物人群集致し、客之好ミニ応し近辺方酒食取寄、右代錢之内二割程ツ、右平治方江請取候由ニ而、近辺潤ひ相成候処、当春火

之元厳重被^(平出) 仰出候ニ付、追々見物相減し、當時は日々二組三組ツ、は見物参候得共、賑候程之儀ニも無之、群集致し候は全庭開当分之由、右起発之入用は前書之伊兵衛跡当時餌鳥請負人^(朱書) 方金三百兩程右平治養子駒吉実家、日光道中鉢石宿高橋佐左衛門儀身上合相応之ものニ付、同人方も三百兩余借受、右金子を以取建候儀ニ而、外ニ相仕は無之由、玉屋と有之候は千駄木町家主ニ而料理渡世致し候伊兵衛ニ有之候得共、同人は間口五間奥行四間半程之住居ニ而、身上不如意之ものニ付、中々右平治^(朱書) 相仕ニ可成身柄ニは無之由ニ付、全同人一分之発意と相聞、右町触申渡等前段之通ニ付、新規之儀ニは御座候得共、素方村内之持地所江纔之買添地致し候迄^(平出) 而場末之儀ニも有之、殊ニ同所辺植木屋共儀は何レも手広之庭有之、品ニ寄候而は諸家方等も立寄有之候儀ニ付、見鉢宜敷造建鉢もの等立派ニ飭置不申候而は買人之氣進ミ不宜、目立不申候ニ付、銘々形容取繕ひ金高成草木奇石等並置候は業鉢ニ有之候ニ付、旁手広一ト通之儀は異論も無之候得共、人集之招ニ致し、酒食等差出候段超過致し候而は如何ニ有之候処、群集致し候は庭開当座之儀ニ而、追々衰微致し候趣ニ付、其儘差置候とも取締筋ニ拘り候程之儀は有之間敷奉存候、

30 広重の描く江戸名所案内千駄木団坂花屋敷

『絵本江戸土産』第七編
松亭金水著・歌川広重(初代・二代)画
嘉永三〇慶応三年(一八五〇〜一八六七)
図版13

千駄木団坂花屋舗^{せんだきだんこさかはなやしき}
元来植木屋の園なるに近曾種々の花を培て四時の遊観をなせり^{くわんぷいあきやそのちかごろさまざまはなをうゑしひしゆうくわん}

31 浅草寺奥山に梅・四時の草木植え、諸人遊観せしむ

『増訂 武江年表』
斎藤月岑 他 著
嘉永五年(一八五二)記事
関連図版10

○春の頃より浅草寺奥山乾の隅林の内六千余坪の所、喬木を伐梅樹数株を栽、また四時の草木をも栽、池を掘て趣をなし所々に小亭を設く、夏に至り成就し六月より諸人遊観せしむ^{千駄木植木屋六三郎の發起なり}

32 大江戸の繁花追々浅草に及ぶ

『巷街贅説』巻之六

塵哉翁著

嘉永五年（一八五二）

関連図版10

○浅草新園

浅草観世音別当伝法院の裏手は、年久しく樹木生茂りて草むらなりしを、嘉永三亥の頃より、追々大樹とも切取掘おこして平地となし、梅さくら紅葉など植こみて、四季の草花植そへて、子の春より見物の人もありしよし、なを筑山泉水の物好出来て、茶屋も風流に四五ヶ所しつらゐ、秋は菊花作りて、遊客多く集りぬとかや、園中いまだ茶店のみにして、酒食はひさがず、入口なる木戸の内際に、料理仕出す家一軒ありて、此入口は奥山の乾の方へ奥まりてしつらゐ、一と口にして其処より入、逍遙してまた元の口に戻り出る、入口の一ヶ所なるも子細あるべけれど、余程の広場なれば便宜よろしからず、通りぬけにして田甫へ出る口あらば猶よけん、かゝる大掛りの目論見、谷中団子坂なる植木屋何某にして、御庭師植木の御用達、三河島なる植木や七郎兵衛が発頭と云、左もありなん、大江都の繁花追々浅草に及ぶ、こも又世の一革とやいはん歟

33 浅草花屋敷の起源 植木屋六三郎が奥山に造った梅林

「老中阿部伊勢守宛町奉行上申書」

池田頼方作成

嘉永五年（一八五二）

一 浅草寺ノ境内江新規梅林出来候は、右地内賑ひ候様可致企ニ有之、参詣人数目立候程職は不致候得共、薄情ニ流レ候哉、賽物上り高少く境内揚弓場見世もの其外諸商人も右ニ准し難渋致し候逆、伝法院ニ而目論見梅林之儀願相濟、千駄木植木屋六三郎儀受負梅樹其外植込場所之儀は、奥山西之方余地二千坪程是迄植込有之候諸木を切払ひ、平地ニ致し皆出来ニ至り候得は、構之内江仮家を取建候由、右は浅草寺役者同所代官等相加り、弥出来致し候上は徳益ニも可相成と頻ニ粉骨致し候趣、

此儀再風聞之趣ニ而は、前書六三郎は下駒込村百姓ニ而植木屋渡世致し、悴半三郎一同日光御門主并諸家方江手広ニ出入致し候もの共ニ有之、先年方浅草寺境内ニ借地致し居候ニ付、去々戌年十二月中方同人目論見ニ而、同所続植木茂り候場所手広ニ借地致し度旨同所代官江願出、去々正月中上野江伺相濟候ニ付、御鳥見方江御場障り有無問合候処、同三月中障無之旨答有之候ニ付、願之通六三郎江惣坪凡五千坪余借地申付、同十一月中方樹木取除梅桜其外茶花等植木、^(朱書)構之内江腰掛都合八ヶ所入口茶屋壱ヶ所取建、当時専ニ手入致し罷在、右場所は元来浅草寺代官支配ニ有之処、如何之訳ニ候哉、当四月中方上野直支配ニ相成、其後は右代官方ニ而何事も差構不申、素方六三郎父子目論見ニ

而役者并代官等最初方六三郎江加り候儀等無之、一躰観音奥山之儀は容儀宜茶屋女等数人出居候ニ付、遊賑^(朱書)ひ候処、近来右様之ものも無之、其上猿若町近辺相成、奥山ニ而遊び居候もの無数ニ付、此上皆出来相成候共一旦之儀ニ而、向嶋猿若町吉原町江相越候もの共足を止メ候程之儀は有之間敷趣ニ有之、右新規梅林等取建候儀ニ付町触申渡等差向相見不申候得共、繁花成町地等ニ右様之儀有之候而は如何ニも大掛リニ而取締ニも拘り候儀ニ付、容易ニ難被仰付儀は勿論ニ候得共、寺社境内等は別格之儀殊ニ寺院代官等利欲之筋ニは相聞不申、全右六三郎一手ニ取立候儀ニ而、其筋願済之趣ニも有之、猥ケ間敷儀等は相聞不申、殊ニ右境内之儀は都而寺社奉行進退場所之儀ニ付、御場差支有無之打合等有之上は、定而聞届相成居候儀ニ可有之と奉存候、

34 浅草花屋敷、梅桜の花時には、本当に楽しい所に違いない

『幕末日本探訪記―江戸と北京―』
ロバート・フォーチュン 著
文久三年（一八六三）
関連図版10

浅草寺と花園

（中略）浅草の花屋敷には見物客の娯楽のために、鳥や他の動物を収集して見せるので、観客がふと博物学の動物類に興味を持つかも知れない。コレクションは、緑色のハト、斑点のあるカラス、立派な大ワシ、金銀の羽を持ったキジ、オシドリ、ウサギ、リスなどが

目についた。そこは概して、遊山^{ゆさん}に来る江戸市民の娯楽と教訓を当てこんで、いろいろなものがある。ここは梅や桜の花時には、本当に楽しい所に違いない。